

政治理論の方法について

岡崎, 晴輝
九州大学

<https://hdl.handle.net/2324/7151784>

出版情報 : JCSPT Newsletter. 26, pp.3-8, 2008-07-20. 政治思想学会
バージョン :
権利関係 :



政治理論の方法について

岡 崎 晴 輝 (九州大学)

I 政治思想史方法論から政治理論方法論へ

『政治思想研究』創刊号(2000年)に掲載された「座談会・「日本における西洋政治思想史研究の現状と課題」」において、日本において西洋政治思想史・政治哲学を研究する意味、政治思想史研究と政治理論・政治哲学研究との関連、そして政治思想研究と政治学の他分野との関係という問題をめぐって討論がなされました。政治理論との関連で見逃せないのは、松本礼二(敬称略。以下、同じ)が現実問題への適用例の少ない日本の政治理論への不満を表明し、渡辺浩がそれに賛同し、それを受けた斎藤純一がエンカレッジメントの必要性を訴えた箇所です(小野ほか 2000: 71-72)。この座談会が刺激になったのか、その後の政治思想研究では、政治思想史(歴史研究)から政治理論(規範理論)へのシフトが急速に進行しているようです。「かつて思想史を専門とする研究者が主流であった政治思想史学の中で規範理論の占める比率が確実に上昇し、その研究に従事する会員の数も増大している」(小野 2004)。

こうした政治理論の量的拡大は、しかし、政治理論の質的向上を必ずしも意味するものではありません。ここで、川崎修・杉田敦編『現代政治理論』(有斐閣、2006年)を採りあげて、日本における政治理論の現状を示すであろう、興味深い事実を指摘したいと思います。ここで注意を喚起したいのは、同書の人名索引には104人もの名前が記されているのに、日本人の名前はわずか5名しか記されていないことです。しかも、本文で言及されているのは丸山眞男だけであり、岡本仁宏と桜井万里子、高島通敏と松下圭一はコラムで言及されているにすぎません。この事実は、現代日本における政治理論の未発達という現状を端的に示しているのではないのでしょうか。

それでは、こうした未発達状態の原因は何でしょうか。かつて丸山眞男は「科学としての政治学」(1947年)において、戦前日本において政治学が未発達だったのは「より根本的にはわが明治以後の政治構造に規定された結果」(丸山 1964: 344)である、と鋭く分析しました。しかし、現代日本における政治理論の未発達は、そうした政治的要因によって説明することはできないように思います。最大の要因は、幾つかの例外はあるものの(たとえば、Negishi 1996; 押村/添谷 2003: 序章; 将棋面 2006; 根岸 2007)、政治理論の方法論について議論らしい議論がなされてこなかったことに求められるべきではないでしょうか。

周知のように、政治思想史に関しては、クエンティン・スキナーをはじめとするケンブリッジ学派の方法論が紹介されてきました(スキナー 1990)。また、スキナーを含めて、様々な政治思想史の方法論が検討されてきました(小笠原/飯島 1990)。現在も、雑誌『未来』で思想史方法論に関する「リレー連載」が進行中です。しかし、政治理論の方法論については、ほとんど議論されていないようにみえます。

英語圏では、日本とは対照的に、政治理論の方法論に関する、かなりの論文が公刊されています。たとえば、雑誌『政治理論』第23巻第4号(1995年11月)では、ジェフリー・アイザックが、政治理論は現実政治の諸問題に取り組むべきだと問題提起し、様々な理論家が応答しました(Isaac et al. 1995)。また、『政治理論』第30巻第4号(2002年8月)でも、バーリン「政治理論はまだ存在するか」40周年と雑誌『政治理論』創刊30周年を記念して、「政治理論とは何か」という特集が組まれました。

そろそろ日本でも、政治理論を方法論的に反省する時期に差しかかっているのではないでしょう

か。政治理論が政治思想史と異なることは共通認識になりつつあるようですが（小野 2005: 3; 川崎／杉田 2006: ii; 田村 2007: 14-15; 千葉ほか 2008: 3 を参照）、政治理論といっても「方法的には政治思想史研究とあまり違いがな」（渡辺浩）（小野ほか 2000: 68）い状態が続いているように思われるからです。

Ⅱ 理論創造としての政治理論

周知のように、丸山眞男は「思想史の考え方について」（1961年）において、「思想史」と「思想論」とを区別し、「過去のいろいろな歴史的な遺産を単純に素材として扱い、その歴史的な文脈をまったく抜かして、主観的な関心に従って自由に操作する」思想論も「それはそれで十分意味があり、存在理由があります」と述べました（丸山 1996: 69）。政治理論は、丸山の定義するところの「思想論」に属する、と捉える者もいるかもしれませんが。しかし政治理論は、これから述べる理由によって、政治「思想論」と同一視されるべきではないように思います。

（1）政治理論の諸類型 「政治理論」という言葉で理解しているものは、人によって様々だろうと思います。それでは、いかなる理解がありうるのでしょうか。まず最初に、古代から近代のテキストを対象にするのが政治思想史であり、現代——おおそ20世紀であると理解してよいように思います（川崎／杉田 2006: ii を参照）——のテキストを対象にするのが政治理論である、という素朴な理解がありうるでしょう（類型Ⅰ）。しかし類型Ⅰは、政治理論と呼ぶには物足りないように思います。それは、現代を対象にした政治思想史にとどまり、政治思想史とのあいだに方法論上の区別が存在しないからです。

これにたいして、テキストの書かれた時期によってではなくテキストを読む方法によって、政治思想史と政治理論とを区別する理解がありうるでしょう。テキストを歴史内在的に読むのが政治思想史であり、テキストを現代的関心によって解釈し、その現代的意義（アクチュアリティ）を考察するのが政治理論である、と（類型Ⅱ）。この

理解では、採りあげるテキストは古典古代のものであってもかまいません。しかし、古典的テキストを解釈・評価する際に、現代の問題関心に引きつけて解釈し、そのテキストの現代的意義を明らかにしようとするのです。私の考えでは、類型Ⅱも依然として、政治理論と呼ぶには物足りないように思います。類型Ⅱの目的はテキストの新しい解釈・評価であり、その意味において、政治思想史の変種にとどまるように思われるからです（テキストの政治理論的解釈と政治思想史的解釈との関係については、Pocock 2006 を参照）。

そこで、テキスト解釈・評価にとどまらずに、それを手がかりにしつつも新しい理論を創造するのが政治理論である、という理解が浮上することになります（類型Ⅲ）。類型Ⅱがテキストから示唆を得るにとどまるとすれば、類型Ⅲは、テキスト解釈・評価を踏まえつつも、現実政治を批判的＝規範的に理解するために新しい理論を創造しようとするのです。「著者自身が自分を了解していた以上によく、著者を了解する」（ディルタイ 1973: 40）というディルタイの解釈学にならって言えば、「著者自身が理論化した以上によく、その理論を理論化する」ということになるのでしょうか。私の考えでは、類型Ⅲは、政治思想史と区別された目的と方法を確立しており、政治理論と呼んでよいように思います。ただし、後述するように、「理論に突き動かされた」ものに陥り、現実から遊離する危険がないとはいえません。

この点、テキストではなく現実政治を出発点にした「政治理論」理解では、こうした陥穽を回避しやすいように思います。すなわち、現実政治の諸問題に即して問題を設定し、その問題に批判的＝規範的に答えるために新しい理論を創造するのが政治理論である、という理解です（類型Ⅳ）。現実政治を出発点にしている以上、類型Ⅳは「理論に突き動かされた」態度に陥りにくいでしょうが、政治理論を類型Ⅳに限定してしまつては、政治理論の問題設定が狭くなりすぎるかもしれません。私自身は、類型Ⅳの政治理論が最も必要とされていると感じていますが、類型Ⅲの存在理由も十分にあるだろうと思います。

(2) 概念と定義 類型Ⅲにせよ類型Ⅳにせよ、現実政治の批判的＝規範的理解に寄与する新しい理論を創造しようとする試みこそ、政治理論と呼ぶに相応しいのではないのでしょうか。それでは、理論の創造とは何でしょうか。様々な形態がありうるでしょうが、ここでは日本における政治理論の現状を踏まえて、概念＝定義の創造ということを強調したいと思います。新しい概念を創造し、それを定義するという形態の政治理論です。あるいは、既存の概念を再定義するという形態の政治理論です（「概念装置」の重要性については、内田 1985 を参照）。丸山眞男も指摘したように、我々は、概念や定義を含む「ひきだし」を通して、現実政治を見ています（丸山 1964: 455。ウォリン 1988: 38, 127 も参照）。新しい概念＝定義の創造は、我々の政治的視界を切り開き、現実政治を別のように見、ひいては、現実政治を複眼的に見るのに寄与するでしょう。しかも、その抽象化された姿のおかげで、理論は人々に道具として利用されやすくなり、また共有されやすくなるでしょう。

よく知られた例を挙げれば、丸山眞男は「理論信仰」と「実感信仰」、「ササラ型」と「タコツボ型」といった概念を創造し、それを定義することで、日本政治の批判的＝規範的理解に成功しました。松下圭一の「シビル・ミニマム」や「政府三分化説」も然りです。このように新しい概念＝定義を創造すれば、幾何学において補助線を引くがごとく、政治は違ってみえるはずです。逆に言えば、政治が違ってみえてこない「政治理論」は、そもそも政治理論として失敗していると言わざるをえません。

これに関連して、ウィリアム・ギャルストンは、新しい difference principle なるものを提案しています。ギャルストンによれば、政治理論家は次の問いに答えることを求められるべきだということです。すなわち、もし私の言ったことが妥当ないし真実として採用されたならば、いかなる相違 (difference) がもたらされるであろうか、と (Galston 1993: 41)。「相違」をもたらす理論の創造がなければ、いくら「政治理論」を標榜したと

しても、現実政治にたいする立場を表明する「政治評論」であるか、海外の政治理論を輸入する「政治理論学」にすぎない、といっているにすぎないのでしょうか。

たしかに、現実政治にたいする立場を明確に提示することは重要なことです（千葉 2007: 61-62）。しかし、前述の座談会において斎藤純一も認めているように（小野ほか 2000: 76）、政治理論家の場合には、理論を創造する作業——斎藤の言葉をうければ、「新しい分析装置をつくる作業」——が不可欠であるように思います。現実政治にコミットしてきた政治理論家に問題があるとすれば、それは現実政治に取り組んだことにではなく、丸山眞男や松下圭一のように、理論の創造をもって現実政治に取り組んでこなかったことに求められるべきではないのでしょうか。

また、海外で生産された政治理論を参照することも、たしかに有益な作業です。我々がキムリッカ『現代政治理論』を翻訳したのも、そうした狙いがあったことでした。しかし、キムリッカをはじめとする政治理論がアングロアメリカ的なものであるとすれば（早川／福元 2007: 165-169）、海外の理論を直輸入するのではなく、そのバイアスを取り除くことが欠かせないのではないのでしょうか。それ以上に、日本独自の問題に取り組むために、独自の政治理論を生産することが欠かせないのではないのでしょうか。日本の政治理論家は、政治理論の輸入業者——「翻訳理論家や引用理論家」（松下 2006: 123）——にとどまらずに、日本と世界の問題に取り組むために独自の政治理論を生産する、政治理論の製造業者になるべきであるように思います。

Ⅲ 政治理論の手続き

以上、日本の政治理論家は、現実政治を批判的に分析し、あるべき政治を構想するのに寄与する理論、とりわけ新しい概念＝定義を創造することが求められているのではないかと問題提起しました。もちろん、それ以外の形態の政治理論を否定するつもりはありません。たとえば、ポストモダンの「脱構築」という形態の政治理論もありう

るでしょうし、議論を深めるという形態の政治理論もありうるでしょう（たとえば、杉田 2001）。しかし、政治理論の現状を考えると、理論の創造にチャレンジしていくことが、いま以上に求められているのではないのでしょうか。

しかし、理論の創造は口で言うほど簡単ではありません。そこには、重大な危険がともなっているからです。その危険とは、理論の創造が独断と紙一重だということです。どうすれば、政治理論は独断を回避し、説得力を増すことができるのでしょうか。私は、次の二つの手続きが有益だろうと思います。もちろん、この二つは政治理論以外でも求められるでしょうが、独断と紙一重である政治理論の場合、特に求められているように思います。

（1）先行研究批判 まず挙げられるべきは、関連する先行研究を整理・検討する先行研究批判です。このことは、当たり前のことと思われるかもしれませんが。しかし他の分野に比べて、先行研究を批判する作業は必ずしも厳密には要求されてこなかったように思います。このことは、戦後政治学の「問題意識先行型問題設定」（渡部 2001: 57）の影響に帰することができるのかもしれませんが、日本の学界における相互批判の少なさ（丸山 1964: 132）に帰することができるのかもしれませんが、あるいは、それ以外の要因に帰することができるのかもしれませんが。いずれにせよ、先行研究批判をしなければ、その理論が本当に独創的なのか、判然としません。そもそも、先行研究批判をしなければ、独創的な理論を創造することも容易ではありません。

もっとも、先行研究批判が自己目的化すれば、政治理論は、イアン・シャピロの言うところの「理論に突き動かされた」（theory-driven）ものになり、「現実からの逃亡」（flight from reality）に陥りかねません（Shapiro 2006）。そうした陥穽を避けるためには、なぜこの理論を創造するのか、現実政治に即した問題関心を提示することが必要になってくるでしょう。先行研究批判に加えて、現実政治に即した問題関心を提示すれば、政治理論というシステム内部で理論が暴走するという陥

穽を回避しやすくなるはずですが。問題関心によって理論の有意性を主張し、先行研究批判によって独創性を主張するわけです。

さらに言えば、類型Ⅳの政治理論に従事する際、政治理論家は、現場の声に耳を傾けてみてはどうでしょうか。政治理論家が一方的に問題を設定するのではなく、市民活動家、政治家・行政職員などに聞き取り調査をし、現場で活動する人々が知りたいと思っている切実な問いをすくいあげるのです（下図）。そうした問いはそのままでは学問的問題設定にはならないかもしれませんが、こうした段階を経れば、政治理論の問題設定は地に足が着いたものになり、「理論に突き動かされた」態度を更に回避しやすくなるように思います。

海外の政治理論

↑ 参照

日本の政治理論

問題提起 ↗ ↘ 理論提供

現実政治

こうした現実政治との結びつきは、政治理論が政治家や官僚の統治の道具に堕することを意味しません。そうではなく、現実政治の批判的＝規範的理解に資する理論を提供することで、市民や政治家・行政職員の思想や行動を規律する——自律にせよ他律にせよ——準拠枠になりうるように思います。

（2）対話的議論 このように先行研究を踏まえたとしても、規範理論である以上、ある意味では独断的にならざるをえません。経験的な政治科学では、因果関係を実証することは難しくはあっても、不可能ではありません。しかし、規範的問いに取り組む政治理論は「神々の闘争」の只中に置かれている以上、その理論を実証することはできません。しかしこのことは、政治理論が「概念分析」に徹すべきだ（ウェルドン 1957）ということの意味しません。政治理論は、理論を実証することはできないにしても、その理論に説得力を付与することはできるからです。それでは、どうすれば説得力を付与することができるのでしょうか

か。政治理論家の手には、実証以外の方法は残されているのでしょうか。

ここで、二つ目の手続き要件が浮上します。それは、批判を吟味する対話的議論です。ある理論を提示しただけでは、説得力を付与することはできないかもしれません。しかし、その理論にたいする批判を論駁できれば、その理論の説得力を増すことができるでしょう。その際、吟味すべき批判は、実際に投げかけられているものである必要はありません。筆者が想定した批判でもかまいません。「こうした理論にたいしては、次のような批判が投げかけられるかもしれない、云々」というように自問自答するわけです。このように現実ないし仮想の批判を吟味すれば、理論の説得力を増すことができるように思います。ソクラテス・ダイアローグを持ちだすまでもなく、政治理論の伝統には、そうした対話的議論のスタイルがあったはずです。そしてそれこそが、デモクラシーにふさわしい議論の方法なのではないでしょうか（この点については、斎藤喜博の仕事が参考になるのではないかと考えています）。

こうした対話的議論は、説得力を増すことに寄与するだけでなく、日本の政治理論がはらむ一つの弱点を克服することにも寄与するように思います。極論すれば、日本の政治理論では、議論が横に広がるきらいがあるのではないのでしょうか。そこでは、知識は増えたとしても、議論が縦に深まることは少ない。すなわち、現実政治の見え方は変わらないことが少なくないのではないのでしょうか。しかし、批判を論駁する叙述をすれば、叙述の進展が議論の拡散にではなく、議論の深化につながるように思います。

IV 政治思想研究の活性化へ

以上を要約すれば、次のようになります。政治理論の目的は、政治思想家や政治思想書の理解ではなく、現実政治の批判的＝規範的理解であること。そうした目的を達成する一つの、しかし重要な方法として、類型Ⅲや類型Ⅳのように新しい理論、特に概念＝定義の創造にチャレンジすること。そして、独断に陥らないためにも、先行研究批判

と対話的議論を疎かにしないこと。

こうした政治理論の方法論が適切なものであるかどうか、自信はありません。おそらく私自身の理論的諸前提——プラグマティズム、モダニズム、デモクラシー、等々——によってバイアスがかかっているでしょう。そもそも、こうした方法論を提示することにも、おこがましさを感じないわけではありません。しかし、日本における政治理論の現状を考えると、やはり、政治理論の方法論について議論していくことが必要なのではないでしょうか。そして、新しい理論の創造にチャレンジする論文を公刊していく必要があるのではないのでしょうか。

いうまでもなく、政治理論の自立は、政治思想史との離別を意味するわけではありません。たしかに、現代政治の諸問題に取り組むためには、政治思想史の古典だけでは不十分でしょう。しかし古典は、政治理論家が日々の政治問題と取り組むなかで忘れがちな「問い、視座、真実」を教えてくれるでしょう（Saxonhouse 2006: 855）。逆に、政治理論研究も、政治思想史研究に斬新な切り口を提供する可能性を秘めているはずです。しかし、政治理論と政治思想史研究の協働のためにも、政治理論の方法論を確立し、政治思想史から政治理論を自立させていくことが必要になっているのではないのでしょうか。そうして初めて、政治学において政治思想研究を復権させることができるのではないのでしょうか。

引用文献

- 千葉真「マルクスとデモクラシーの根源に立ち返る」、『情況』第3期第8巻第4号、2007年5・6月、43-62頁。
- 千葉真ほか『政治理論のパラダイム転換——21世紀の新しい理論構築にむけて』、平成16年度－19年度科学研究費補助金・研究成果報告書（基盤研究（A）課題番号16203008）、2008年3月。
- ディルタイ『解釈学の成立』久野昭訳、以文社、1973年。
- Galston, William, "Political Theory in the 1980s: Perplexity amidst Diversity," in *Political Science: The State of the Discipline II*, ed. Ada W. Finifter, The American Political Science Association, 1993, pp. 27-53.
- 早川誠／福元健太郎「座談会 私が見たアメリカ政治学」、

- 『日本政治研究』第4巻第2号、2007年7月、153-183頁。
- Isaac, Jeffrey C., et al., "The Strange Silence of Political Theory," with Responses, *Political Theory*, Vol. 23, No. 4, November 1995, pp. 635-688.
- 川崎修／杉田敦編『現代政治理論』有斐閣、2006年。
- 松下圭一『現代政治＊発想と回想』法政大学出版局、2006年。
- 丸山眞男『増補版 現代政治の思想と行動』未来社、1964年。
- 丸山眞男「思想史の考え方について——類型・範囲・対象」、『丸山眞男集』第9巻、岩波書店、1996年、45-81頁。
- Negishi, Takeshi, *The Methodological Foundations of the Study of Politics*, Keio University, HOGAKU-KENKYU-KAI, 1996.
- 根岸毅「最終講義 政治学はどのような学問か?」、『法学研究』第80巻第3号、2007年3月、69-126頁。
- 「『最終講義 政治学はどのような学問か?』をめぐる往復書簡」、『法学研究』第80巻第9号、2007年9月、31-53頁。
- 小笠原弘親／飯島昇藏編『政治思想史の方法』早稲田大学出版部、1990年。
- 小野紀明ほか「座談会・「日本における西洋政治思想研究の現状と課題」」、『政治思想研究』創刊号、2000年、55-81頁。
- 小野紀明「新代表理事の挨拶 歴史研究としての政治思想史・政治理論」、『政治思想学会会報』第18号、2004年。
- 小野紀明『政治理論の現在——思想史と理論のあいだ』世界思想社、2005年。
- 押村高／添谷育志編『アクセス政治哲学』日本経済評論社、2003年。
- Pocock, J. G. A., "Theory in History: Problems of Context and Narrative," in *The Handbook of Political Theory*, eds. John S. Dryzek, Bonnie Honig and Anne Phillips, Oxford University Press, 2006, pp. 163-174.
- Saxonhouse, Arlene W., "Exile and Re-entry: Political Theory Yesterday and Tomorrow," in *The Oxford Handbook of Political Theory*, eds. John S. Dryzek, Bonnie Honig and Anne Phillips, Oxford University Press, 2006, pp. 844-858.
- Shapiro, Ian, *The Flight from Reality in the Human Sciences*, Princeton University Press, 2005.
- 将棋面貴巳『政治診断学への招待』講談社、2006年。
- スキナー、クエンティン『思想史とはなにか——意味とコンテキスト』半澤孝磨／加藤節編訳、岩波書店、1990年。
- 杉田敦『デモクラシーの論じ方——論争の政治』筑摩書

房、2001年。

田村哲樹「規範理論と経験的研究との対話可能性——熟議民主主義論の展開を事例として」、『年報政治学 2006-II 政治学の新潮流——21世紀の政治学へ向けて』2007年3月、11-35頁。

内田義彦『読書と社会科学』岩波書店、1985年。

渡部純「戦後政治学と日本型多元主義論——何が引き継がれるべきか」、『青森法政論叢』第2号、2001年8月、47-68頁。

ウェルドン、T. D.『政治の論理』永井陽之助訳、紀伊国屋書店、1957年。

ウォリン、シェルドン、S.『政治学批判』千葉眞／中村孝文／斎藤眞編訳、みすず書房、1988年。